

恋に狂い咲き 4

1 朝を味わう (真子)

「なんだか、いままだ夢の中にいるみたい……」

恋しいひとの寝顔を見つめ、真子は小さく笑ってそんな吹きを漏らした。

いま真子がいるのは、彼女の父である真治の経営するホテルのスイートルーム。昨日はこのホテルのオープン記念パーティーが開催され、真子と和磨も招待されたのだ。

パーティーも終わりに近づいた頃、父に最上階の部屋へ案内された和磨と真子は、みんなから婚約祝いのサプライズを受けたのだった。

突然の婚約パーティーにはとんでもなく驚かされた。和磨の家族まで勢ぞろいして……

まさか、和磨さんのお母様やお祖母様にお会いすることになるなんて思いもしなかった。

わたし……本当に、和磨さんと正式に婚約しちゃったんだ。

真子は自分の薬指に嵌っている指輪を見つめる。大粒のダイヤモンドがキラキラと輝きを放つ。

和磨と出会って、まだ二週間しか経っていない。そのうえ和磨は、朝見グループの会長の息子で、御曹司だったのだ。そんなひとと付き合うことになったばかりか、たった半月で婚約までしてしまうなんて……。あまりの展開の速さに、どうにもおろおろしてしまう。

真子は和磨を見つめた。

本当に和磨さんと結婚するんだ――

そのことを現実として受け止めようとした瞬間、胸に不安の影が差し、真子は顔をしかめた。

朝見家はとんでもない家柄だ。そんな家にわたしはお嫁に行くことになる。

婚約パーティーはとても楽しかったし、和磨さんのご両親もお祖母様もとてもやさしく接してくれた。けど……みんな上品で、自然に教養が滲み出ている……自分との生まれの違いを、強烈に感じさせられた。

緊張と不安で心細くなった真子は、無意識に父と兄に救いを求めようとした。けれど、ふたりとも緊張なんてしてなくて……血の繋がりがあっても、父と兄もまた、自分とは相容れない世界の住人のように思えた。

でも、そんなことを思っていたなんて、和磨さんにも、お父さんたちにも言えないよね。それに、言っただころで、「そんなことあるもんか」って言われて、終わるような気がするもの。

だからわたしは、自分で乗り越えないといけないんだ。

これから先、和磨さんと生きていきたいければ……

沈んだ気持ちになったとき、和磨の瞼が微かに動いて目が開いた。

真子はふっと息を吐く。そうして、不安な思いを心の底に押し込め蓋をした。

「和磨さん」

呼びかけると、和磨が真子のほうを向く。そのままじっと見つめられ、彼の眼差しの強さにトク

ンと心臓が跳ねる。

「珍しいな。僕より先に、君が起きてるなんて……」

「自分のベッドじゃないからかも……」

「そのコメントには異議を唱えたいな」

「はい？ どうしてですか？」

「君と僕が衝撃的な出会いをした日、職場で寝てしまった君を起こすには骨が折れたからな」

まだ眠たそうにそう答えた和磨は、さっと腕を伸ばして真子を抱き寄せた。

真子は和磨の胸に頬を当て寄り添う。和磨の心臓の鼓動が、心地よく耳に響く。

「あのときは……異常な事態だったから……」

真子は肘をついて頭を上げると、上から覗き込むように和磨を睨んだ。

「だいたい、あれは寝たんじゃなくて、気絶したんですよ。気絶！」

人差し指で和磨の鼻先をつんつん突きながら訂正する。

暗闇の中、突然ファーストキスを奪われたのだ。

ほんと、あのときの和磨さんってば、とんでもなかった。

「膨れっ面も可愛いし……寝起きに叱られるというのも悪くないな」

「は？」

和磨の言葉に啞然としてしまった真子だが、たちまち、ぷーっ頬を膨らませる。

「もおっ、ちゃんと普通に返事してください」

「ちゃんと普通につて？」

「だ、だから……」

説明しようとしたものの、そうすることに意味を見出せなくなり、真子は「もういいです」と言つて口を閉じた。

「なんだ？ 中途半端にされると落ち着かないぞ。真子、ちゃんと思っていることを言ってくれ」

「普通がわからない和磨さんに……いえ、やっぱりいいです。考えてみたら、普通なんて……ひとそれぞれ違いますよね？」

「まあ、それはそうだな」

同意する和磨を見ているうちに、真子は笑いが込み上げてきた。

わたし、これから和磨さんの『普通』にどんな感化されちゃったりするんじゃないかな。自由人な和磨さんに、負けず劣らずな自由人になって……そうなったら、人生はもっと味わい深く、楽しいものになるんじゃないかな？

「何を考えてる？」

和磨が聞いてくる。彼の顔を覗き込んだままだった真子は、にこつと笑い、再び和磨の胸に寄り添った。

「楽しいなって……和磨さんこうしていられて……」

「……」

すると、黙り込んでいた和磨が、急に真子を力一杯抱き締めてきた。

「か、和磨さん？」

「……君は……俺に、これまで味わったことのない感覚を引き起こす」

そう言つて、和磨は戯れるように首筋に触れてきた。指先が触れるか触れないかという感じで肌を撫でていく。

ううっ！

堪らなく甘い刺激に、ピクピクツと身を震わせてしまいそうになる。真子は慌てて和磨から離れようとしたが、和磨がそれを許さない。

「かつ、和磨さん、もう起きましよう。今日はこれから仕事に行くんですよ！」

真子は、自分の身の内に生まれた甘い感覚を打ち消そうと大きな声で叫んだ。

「ちよつと撫でただけなのに、なんでそんな大げさな反応をする？」

和磨は不服そうに言う。

和磨さんは、ちよつと撫でただけのつもりかもしれないけど、こつちはとんでもなく感じちゃうんだもの。

「与えた方と、与えられた方には、ずいぶんな差があるってことです」

そう言つてやると、和磨は眉を寄せて考え込んだ。そして……

「つまり君は、逃げたくなるほど性的快感を与えられたってこと……いでっ！」

真子はみなまで言わせず、和磨の頭を軽く殴つてやった。そして和磨に捕まる前にベッドから出る。

「なんだ、本当に起きるのか？ まだ早いぞ」

部屋の時計を確認して和磨が言う。朝の六時を過ぎたところで、確かに起きるにはまだ早い。「ホテルの庭園を散歩したいんです。凄く綺麗なんですって。青野さんが、お時間がありましたらぜひ足を運んでくださいって言ってました」

青野は真治の補佐をしている人間だ。昨日は、忙しい真治に代わってホテルを案内してくれた。和磨は「そうか。なら、散歩してから朝食だな」と言い、さっそく、ベッドから下りる。

真子はふと思いついて窓に歩み寄り、そのままベランダに出てみた。和磨も真子のあとをついてくる。

「うわーっ、素敵」

夜景も幻想的で美しかったけど、日が出てからの景色も美しい。爽やかな風に頬をくすぐられて、最高に贅沢な気分を味わう。

「環境がいいんだろうな。空気が美味しい」

「ほんとに」

和磨は真子の隣に立ち、肩を抱き寄せてくる。ふたりは、しばらく寄り添ったまま、そこからの眺めを楽しんだ。

部屋に戻って身支度を済ませた真子は、和磨と相談し朝食をレストランで取ることにした。

「奈々ちゃんたちはどうするんだろう？」

真子の友人である島津奈々子に松野圭太、そして会社の後輩である深田由愛もこのホテルに泊

まっている。和磨と真子の家族は、婚約パーティーが終わったあと、それぞれ家に帰ってしまった。

「和磨さん、ちょっと奈々ちゃんに連絡してみてもいいですか？」

「島津に？」

「はい」

奈々子はすぐに電話に出た。用件を伝えると、松野と深田と一緒にレストランで朝食を食べるといので、和磨の了解を取り、みんなで一緒に食べることにした。

レストランに行く時間を決めた真子は、その前に和磨と庭園へ向かう。

「広いな」

庭園全体を見回し、和磨はホテルの建物を見上げた。

「庭と建物の調和が取れてるな。それに、ホテルの敷地だけで完結していないところがいい」

「ほんとですね。ホテルが周囲の景色に溶け込んでますね」

父の建てたホテル……なんだか誇らしさが胸に湧いてくる。

すると、和磨が真子の腰に手を回しぐつと引き寄せる。真子は慌てて抵抗した。

「なんだ？ どうして嫌がる？」

「だって……朝ですよ。それにここは公共の場で……人目もあるんですから遠慮してください」

早朝とはいえ、庭園内には何人かの宿泊客がいる。

「一緒に歩くだけじゃないか。人目を憚る必要もないだろう」

一緒に歩くだけ？ ベったりくっついて歩こうとしてたくせに……ほんと困ったひとだわ。

真子は和磨に呆れつつ、彼の手を握り引つ張るようにして歩き出した。和磨はそれで機嫌を直し

たようで、文句を言わずについてくる。そんな和磨に真子は笑いを噛み殺した。

ふたりで、池の周りの遊歩道を歩く。中央に噴水のある池は浅く、落ち着いた色合いの石が水底に敷き詰められている。

池の周囲にあるクレマチスの垣根も見事で、紫の花の美しさにぼおっと見惚れていたら、パツと和磨の顔に遮られた。ぎょっとした一瞬後、ふたりの唇が重なっていた。

「んんっ!？」

真子は慌てて和磨を押して離れた。

「ダメですよ。ここは外なんですよ」

「大丈夫だ。ここなら周りから見えない」

確かに、ふたりの周囲には垣根があつて、人に見られる心配はなさそうだけど……

「そ、それでもダメです。外でキスなんて恥ずかしいですよ」

「そうか？ 俺は興奮するけどな」

「こ、興奮!? そ、そんな和磨さんだけです!」

だいたい、すでに『俺』になっちゃってるし……『俺』って口になっている和磨さんは要注意だ。

「そんなことあるものか」

反論する和磨の声は、すでに甘さを帯びている。彼は真子の唇のラインを、指先でじわじわとなぞってきた。

ううっ。そ、そんな風にされると……身体がおかしな感じに反応しちゃうんですけど。

唇に生じる刺激にいたたまれず、真子は後ろに身を引く。すると和磨の腕がさっと伸びて、身体を引き寄せられた。

「君が悪いんだぞ」

「えっ？ わ、わたしが？」

「いや、君がじゃないな。君の唇が……だ。俺を甘く誘ってくる」

秘密を語るように和磨は耳元で囁く。その声の甘い響きに意識が囚われてしまう。

和磨の顔がゆっくり近づいてくるのを見ても、もう抗う気持ちは湧いてこなかった。唇の感触と温もりに、真子の意識はあつという間に絡め取られた。

ホテルのレストランで、奈々子たちと一緒に朝食を済ませたあと、真子は和磨と急いで部屋に戻った。出社まであまり時間がないのだが、スイートルームの部屋を名残惜しい気分で見つめてしまう。

「どうかしたのか？」

真子は彼に微笑み返した。

「昨日からいるんなことがあったでしょう？」

「ああ、あったな。ホテルのオープンングパーティー、さらに君は、野本の籍に入る手続きをして、いまでは芳崎真子じゃなく、野本真子だ」

「どうして面白くなさそうに言うんですか？」

「君が野本の籍に入って、真治さんが喜んでるのはいいことだと思ってる。だが……」

「だが？」

「君と拓海たくみが同じ苗字になってしまったのは……どうにも面白くない」

「野本さんは兄ですよ」

そう言ったら、おでこを小突かれた。

「君だって、まだ実の兄という意識が持てないでいるくせに」

言い当てられて、真子は笑って誤魔化す。

「面白くはないが、よかつたと思うぞ。それに、そう長くないうちに君は朝見姓になるわけだしな」  
確信を込めて言う和磨に、真子の笑みは、どうしてもぎこちないものになってしまった。

そんな真子の心を見透かすように和磨が見つめてきて、つい視線を逸そらした。すると、和磨に両肩を掴つかまれ、正面を向かされる。

「僕との結婚が嫌だつてことじゃないよな？」

「そ、そんなことないです。ただ……その……朝見の家に飛び込む勇気が……まだ」

真子は、自分の抱える戸惑いをもごもご口にした。

「勇気ねえ」

和磨は少し考えたあと、真子の頬に軽くキスをする。

「君には、いつだつてこの俺がついている。なんの心配もいらぬぞ」

和磨は真子の不安を取り去るように自信満々に請け合う。彼はこの結婚に、なんの心配もないように、真子の不安はさらに膨らむ。

やっぱり、和磨さんにこの気持ちを理解してもらうのは難しいみたいだ。……わたしが頑張つて乗り越えるしかないんだよね？

「それじゃ、真子、行こうか」

荷物を手にした和磨が促うながしてきた。頷いた真子は、小さなバッグと和磨の母である彩音あさねに貰もらった桔梗ききょうの描かれた絵手紙を取り上げる。

ホテルのフロントにキーを返したら、正面玄関に向かうまでの間に、ホテルのスタッフが大勢集まってきた。なんと、真子と和磨を見送ってくれるつもりらしい。

驚いていると、和磨が「当然だろう」と言う。

「君は、このホテルのトップの令嬢なんだからな」

「令嬢？ わたしが？」

状況を受け入れられないまま、真子は和磨の車に乗り込み、大勢のスタッフに見送られてホテルを後にした。

会社に到着し、裏口から中に入る。並んで歩く和磨と真子に、社員たちが注目してきた。それがどうにも気になってしまい、真子は和磨に声をかけ、そそくさと側を離れる。当然、和磨は渋い顔をしていた。

こういうとき、和磨は周りの目をまったく気にしないので、困ってしまう。

「あつ、真子先輩、やつときた」

更衣室に入り、ほっと息を吐いたら、深田が声をかけてきた。奈々子もいる。

「真子、おっそいよ。今日はもう来ないのかと思ったじゃない」

「ごめん。ふたりは早かったのね？」

「わたしらは、朝食を食べてすぐホテルを出てきたからね」

「真子先輩。ほんと楽しかったですよ。ありがとうございます」

「わたしにお礼を言われても……」

「だって、誘ってくれたのは真子先輩ですし。それに先輩は、あのホテルを経営しているひとのこ  
息女なんですから」

「ご、ご息女……」

「なあに、ご息女って？」

「芳崎さん、ご息女だったの？」

着替えの途中だった同僚たちが話を聞きつけ、周りに集まってきた。

どうしようかと焦っていると、奈々子が「そうなのよ」と肯定してしまふ。

「な、奈々ちゃん」

「やっぱり、システム部のみんなには話しておいたほうがいいって。わたしら身内だもん」

「まあ、島津さん、嬉しいことを言ってくれるじゃないの」

同僚のひとりが嬉しそうに言う。他のみんなも同じ気持ちのようだ。

「それで？ 芳崎さん、ご息女だったわけ？ あっ、つまり、野本さんの家がお金持ちだったって

こと？」

システム部のみんなは、すでに拓海と真子が兄妹だったということを知っている。奈々子が言っ  
たように、システム部は人数が少ないせいとか、他の部署よりも団結力が強い。それが真子を含めた  
みんなの自慢だったりもする。

「そういうことです」

「あらま。野本さんの人気、また上がるわね」

「ねえねえ、ちよっとお」

同僚のひとりが、顔を輝かせて真子に身を寄せてきた。

「芳崎さん、その指輪。まさか本物？」

彼女は真子の左手を指さして言う。全員が目が、真子の左手の薬指に嵌った指輪へ向いた。その  
一瞬後、更衣室内にどよめき上がる。みんなの驚きは凄まじかった。

「それって、もしかして婚約指輪!？」

「ええーっ！ よ、芳崎さん、あなた専務さんと婚約したの？」

「したんですよ」

興奮状態の同僚たちを笑いながら、深田が答える。

「しかも、お父さんの籍に入ったので、今日からこの子は野本真子なんです」

「ええーっ！」

深田と奈々子が次々と暴露し、更衣室中は大騒ぎになった。



ようやく静まってきたところで、年嵩としかさの同僚が考え込むように口を開いた。

「けど、その指輪を嵌はめたまま、仕事をするの？」

その指摘に真子は顔を曇らせた。実は真子もそう思っていたのだ。けど、外すという選択もできなくて、ちょっと困っていた。

「あの……やっぱり、ダメですか？」

「ダメ……ってわけじゃないけど」

「うーん、さすがに大きすぎるよね。仕事につける石の大きさじゃないかも」  
奈々子がそう意見すると、他の同僚たちも同意して頷く。

そうよね。やっぱり、この指輪をつけたまま仕事をするのは、やめたほうがいいわよね。でも、外している間、どこに置いておけばいいんだろう？ もし失くしたりしたら……

「別にいいんじゃないですか？」

考え込んでいたら、深田がみんなに言う。

「だって婚約指輪なんですよ。仕事中に身につけてても、問題ないと思いますけど」

その深田の発言に、「わたしもそう思うわよ」と、別の同僚が賛成する。

「わたしだって、婚約中は嵌めてたし……まあ、そんな大きな石じゃなかったからだけ……」

真子の指輪を見て、その同僚は笑う。

そこで仕事が始まる時間になってしまったので、結局、この話はうやむやのまま打ち切られた。

仕事を開始したものの、真子は指輪のことが気になってしまい、なかなか仕事に集中できない。

指輪を気にせずにいるよと思うのだが、キーボードを叩いているとキラキラしたダイヤが目飛び込んでくる。そうなれば、どうしたって気になってしまう。

おまけに、今朝の更衣室での話が伝わったのか、システム部の同僚たちの視線も感じるし……

仕事で話をしているときも、指輪をちらちら見られて……恥ずかしくて堪たまらない。

「真子先輩」

いたたまれなさを感じていたら、深田が話しかけてきた。

「はい？」

「そんなに気になるなら、仕事するときだけ外したらどうですか？」

「……そうね。そうしようかしら……」

そうだ。仕事の間は、和磨さんに預かってもらったらどうだろうか？ それだったら安心だわ。

「けど、専務さんは指輪を嵌めて欲しいでしょうねえ」

それはそうだろうと思う。わたしだって、何も問題がなければ身につけていたいもの。この指輪

には、和磨さんの思いが、愛が詰まっているんだもの……

「それとは別に、普段使いのやつを買ってもらったらどうですか？」

指輪を見つめていたら、深田がそんなことを言う。

「普段使いのやつ？」

深田は「そうそう」と頷く。

「専務さんなら、ちゃんと説明すれば、もう一個どころか何個でも買ってくれますよ」  
「深田さんったら」

真子は笑った。深田にかかると、どんな問題も軽く解決してしまうようだ。

「深田さん、ありがとう。心が軽くなったわ」

「どういたしまして」

そのあとは仕事もはかどり、真子は深田に感謝した。

## 2 動揺にシヨック 〔和磨〕

「新山さん、どうしてるんでしょうか？」

和磨と一緒に、専務室で昼飯の弁当を食べていた真子が、考え込みながら口にした。

「何も連絡はないし、上手くやれてると思うぞ」

「そうですね。新山さん優秀だし、きつと上手くやれてますよね」

真子は笑顔で頷く。

新山恵美は、先週まで真子と同じ部署にいた同僚だ。彼女は今日から本社勤務になっている。異動先は、元々和磨が手掛けていた本社のプロジェクトチーム。現在、和磨の従兄弟である高杉智慧が指揮を執っている職場だ。

以前より、智慧から和磨の抜けた穴を埋める有能な人材を寄越せとせっつかれていたのが、新たに新山を入れたのだ。新山のことを気にかけている真子には言えないが、この異動が吉と出るか凶と出るか、まだわからない。けれど、人選には自信があった。新山なら、女性を軽視するきらいのある智慧と渡り合えるに違いない。そして、智慧に大きな影響を与える気がする。和磨はそれが楽しみでならなかった。

ただ、真子の仕事を補佐していた新山が急になくなったため、一時的に拓海が真子の仕事を手伝えることになった。実は、和磨が改造企画部に引き抜くまで、元々拓海が真子と組んでいたのだ。だから誰よりも適任だし、妹を溺愛している拓海は、真子の手伝いができて嬉しいようだが、これはあくまで一時的な処置だ。このまま続けられれば、拓海の負担が大きくなってしまふ。

新山に代わる、そこそこの有能な人材を本社から引つ張ってくることはできるのだが、真子の側に置くなら女性が望ましい。だが、和磨の人材バンクには女性がいらない。父親の真人か、本社の知り合いに頼んでもいいのだが……。あまり借りは作りたくないしな……

和磨は思案しながら、美味しそうに弁当を食べている真子を見つめた。

もぐもぐ口を動かしている真子は、なんともいえず可愛い。その唇を舐めたい欲求が抑えられなくなりそうになったところで、それを察知でもしたのか真子が和磨に視線を向けてきた。

和磨は咄嗟に話題を探す。

「新山がいなくて、仕事が大変なんじゃないか？」

「まだ大丈夫です。先週のうちに、新山さんと溜まっていた仕事を片付けたところでしたから。そ

れに、午後には野本さんが来てくれることになってますし」

そう言った真子の表情が、少しずつ曇っていく。

「でも野本さん、自分の仕事の他にわたしの仕事までなんて、無理をするんじゃないかって……」

そんなことはないと言えればいいのだが……嘘はつけない。和磨は「そうだな」と肯定した。

「や、やっぱり、わたし一人で頑張ってみます」

「いや、それはやめておけ」

「どうしてですか？」

「君が奴の心配をするのと同じだけ、あいつも君の心配をしてる。……そして俺はどっちも心配だ。

安心しろ。拓海が無理をしないように、俺も注意しておくよ」

「和磨さん。……ありがとう」

真子に感謝されていい気分になった和磨は、真子に顔を寄せた。

「礼なら、こっちにくれ」

唇をつき出して催促したら、ぺちんと額を叩かれた。

「なんだ。君の礼の気持ちはこんなものか？」

「拗ねてもキスしませんからね」

ふいとそっぽを向く真子も可愛い。

そんな真子を眺めつつ、和磨は試食の弁当を食べ終えた。さっそくアンケートを書き込む。

改装中の社員食堂が完成するまで、弁当のデリバリーをすることになった。この弁当はその試食

品だ。真子の所属するシステム部を始め、今週から順番に社員たちにもこの弁当の試食をしてもらっ

ている。試食を終えたら、全員にアンケートを書いてもらうことになってた。

真子も食べ終わり、アンケートを書き始める。弁当についてふたりして意見を出し合うのは楽し

い。だが、楽しい時間はあつという間に過ぎ去るものだ。

「それじゃ、わたし、そろそろ戻りますね」

時計を確認した真子が、そわそわしながら切り出してきた。和磨は立ち上がりうとする真子の邪

魔をして、その身体を抱き締める。いいな、この柔らかさ。和磨は真子を抱く腕に力を込めた。

「……和磨さん」

「わかってる。もう仕事の時間だな」

仕事は好きだが、真子との時間はもつと好きだ。

早く夜にならないだろうか？ そうしたら、あんなことやこんなことを……

「あの、和磨さん」

「うん？」

頭の中で淫らなことを思い描いていた和磨は、真子に目を向けて固まった。

なんと真子は、薬指に嵌めていた婚約指輪を、なんの躊躇いもなく、さっと抜き取ったのだ。し

かも、それを和磨に差し出してくる。

「これ、預かっておいてくれませんか？」

「……どうして？」

信じられないものを見た和磨は、ひどく動揺し、それしか言えなかった。真子はいえ、そんな和磨の反応に驚いている。

「あ、あの……？ 和磨さん？」

動揺から覚めると、和磨の中に激しい怒りが湧き上がった。

「なんで外した！ なんで外せる？」

怒りのまま、和磨は大きな声で怒鳴った。

和磨の怒りを受け、真子の顔からは血の気が引いている。それがわかっても、込み上げてくる怒りは収まらない。

「あ……こ、これ……その……や、やっぱり凄く目立つみたいで、それでみんなから注目されるのが、は、恥ずかしくて……そ、それで……」

恥ずかしい？ 俺が愛を込めて贈った指輪が恥ずかしい？

この指輪を贈ってからずっと、真子は肌身離さずつけてくれていた。俺はそれが、本当に嬉しくて……なのに……

怒りの底にあるのは、哀しみだった。この指輪は俺の愛そのもので……真子にとってもそうだと思っていたのに……。なぜ、そうもあっさり指から外してしまえるんだ？

「大事な指輪だし……！ 仕事中にぶつけて傷つけるのも嫌だし……かといって外して持っていたら失くしそうだから、和磨さんに預かってもらうのが一番だなんて思って……」

真子が指輪を外したショックがあまりに大き過ぎて、和磨の耳に彼女の言葉が入ってこなかった。

和磨は怒りに任せ、真子が手にしている指輪を取り上げた。

「かつ、和磨さん？」

真子は呆然と和磨を見上げてくる。和磨は真子から顔を背けると、立ち上がって彼女から離れた。こんな態度を取っては、真子が傷つくど頭ではわかっている。だが、怒りに囚われているいま、自分を制御することができない。

憤りを抑えられず背を向けていたら、背後で真子の立ち上がる気配がした。

真子はそのまま何も言わず部屋から飛び出していく。

ひとりになり、和磨は額を押さえた。その手には小さな硬い物がある。

和磨は、ゆっくりと手を開いた。手のひらに転がる指輪を見つめ、胸が塞ぐ。

和磨は痛いほど指輪を握り締め、椅子に身を投げ出すように座り込んだ。

どのくらいばおつとしていたのか、誰かが専務室のドアをノックする。

「野本です。いまよろしいでしょうか？」

野本か……まったく、よろしくない。

そのまま黙っていたら、「失礼します」と勝手にドアを開けられた。顔を覗かせた拓海は、なぜか面白そうに口元を歪めている。

まるで和磨の様子を観察するように眺めながら、拓海は机の手前まで歩み寄ってきた。

「誰も入っていないとは言っていないぞ」

「入って来るなとも言われませんでしたか？」

「出て行け。いまはお前の相手をする気分じゃない」

「何をそんなに怒っているんです？」

「君には関係ない」

「そうかな。貴方と真子が別れてくれれば、僕としては万々歳です。ちっとも無関係じゃない」

「俺たちは別れたりしない！」

拓海の言い草でさらに怒りが煽られ、和磨は指輪を握り締めている拳を思い切り机に叩きつけた。

「なんだ。これでようやく真子と一緒に住めると喜んだのに……」

「拓海、こっちは、そんな冗談に付き合う気分じゃないんだ」

「そうか」

急に拓海が口調を変えた。いままで愉快そうに和磨を見ていた表情を改め、真顔で、「なあ、和磨、何があったんだ？」と聞いてくる。

「真子に聞いてきたんじゃないのか？」

「いや。ただ、システム部に戻ってきた真子が、泣きそうな顔で島津さんに取り縋って……いま更衣室に籠ってる。兄としては、いったい何があったのか、お前に問い質さないわけにはいかない」

「……言つとくが、俺は何もしていないぞ」

「本当か？」

「疑わしげに言うな。こっちは傷心中なんだ」

「傷心中ねえ。それでいったい何があった？ いや、真子が何をやったっていうんだ？」

「なんだっていいだろ？ もう出て行ってくれ」

「そう言われても、真子のこと心配で、放つても置けないんだよな」

「俺のことも少しは心配しろよ」

「何を拗ねてんだ。らしくないぞ、和磨」

その言葉にむっとしたが、確かに、こんなのは俺らしくない。そう思ったら、少し冷静になれて、いくぶん憤りが静まった。

和磨は座ったまま拓海に右手を差し出し、その手を開いた。

「うん？ 指輪？ それって……あれだよな？」

「そうだ。真子に贈った婚約指輪だ」

「真子が指輪を返すなんて……お前いったい真子に何を言ったんだ？」

「だから俺は何も言っていない！ ……この指輪が恥ずかしいから、預かっておいてくれて……」

真子が言い出して

「ははあ、確かに大きなダイヤモンドだからな。仕事につけてたんじゃ悪目立ちするだろう。きっと職場の同僚からかわれたりしたんじゃないのか？ ……で、お前は何を怒ってるんだ？」

和磨は拓海に呆れた。

こいつ、ここまで言っただけからじゃないのか？

「決まってるだろ。この指輪を外したことだ。しかも、なんの躊躇いもなくだぞ」

口にしなから気持ち沈んでしまい、和磨は肩を落として指輪を見つめた。

「この特別な指輪を……なんの躊躇いもなく、俺の目の前で……外されたんだぞ」

「そういうこと……か」

またからかってくるのかと思つたが、拓海は笑いもせずに和磨を見つめてくる。居心地が悪い。

「なんだ？ 言いたいことがあるならばつきり言えよ」

「真子もショックを受けてるぞ。まさか指輪を外したせいで、お前がそれほどまでに怒るとは思わなかつただろうからな。わかつていけば、絶対に外したりしなかつたさ」

「……こんなことにこだわる俺がおかしいのか？」

「いや、そうは言わない。ただ、客観的に見て、仕事中に嵌めるには、やっぱりその指輪は不適切……  
というか、高価過ぎるな」

「……この指輪を選んだのが間違いだつたつて言うのか？」

「そんなことあるわけないだろ」

「……なら、どうすればよかったんだ？」

「お前なあ」

「なんだ？」

「いいから、今日仕事が終わつたら、ふたりで宝飾店に行け。それで、普段真子が気兼ねなく身につけていられるような、もつと安い指輪を買つてやれよ。その指輪は、このままお前が預かつておけばいいさ」

「真子に贈つたものなのか？」

「高価すぎるんだ。真子の気持ちになつて考えてやれ」

そう言われても、和磨は納得できず、上手く気持ちを収められない。

「とても大事なものだからこそ、真子はお前に預けたかつたんだと思うぞ。簡単に外したからつて、  
どうでもよかつたわけじゃないさ」

そんなんだらうか？ そう思いたいけれど、拓海の言葉は和磨の心をすり抜けていく。

こんな風に動揺するのは初めてで、和磨はそんな自分に対してもショックを受けていた。

「真子を呼んできてやらうか？」

拓海が気遣うように申し出てくれたが、和磨は首を横に振つた。

そろそろ昼休憩が終わるし、真子と話すのは、もう少し冷静になつてからにしたほうがよきそうだ。

和磨はスーツの胸ポケットに指輪を落とし、仕事の顔に戻つた。

「仕事に取りかかろう」

拓海は頷き、すぐに部屋から出て行つた。

### 3 必要な諍い 〈真子〉

「ああ、もおつ。ほら、あんたがぐずぐずしてるから、仕事が始まつちやつたわよ」

奈々子から責めるように言われ、真子は肩を落とす。

専務室を飛び出したあと、奈々子に泣きついた真子は、そのまま更衣室に連れて来られた。奈々子に事情を説明したら、あんたが悪いと叱られた。すぐに謝りに行けと言われたけど……和磨さんと顔を合わせるのが怖い……この世が終わったような気分だ。

あのとき、和磨の心が自分から離れてしまったのを、強烈に感じた。

後悔があとからあとから湧いてきて、胸の中で荒れ狂ったように渦巻いている。

なんでわたし、あんな風に何も考えず指輪を外しちゃったんだろう？

指輪は和磨に預かってもらえばいいと考えついて、単純にそれが一番いいと思ってしまった。

それがまさか、こんなことになるなんて。

和磨さんがあんなにもショックを受けるなんて……あんなにも傷つくなんて思いもしなかった。わかっていたら、決して指輪を外したりしなかったのに……

だけど、いまさらだ。やってしまったことは、なかったことにはできない。どんなに後悔しても遅いのだ。

指輪を外した瞬間の和磨の顔は、いまでも脳裏に焼きついている。強い怒りと痛み。そして深い哀しみが刻まれていた。

このまま許してくれなかったらどうしよう？

絶望に捉われる。

「ほらほら、真子。しゃんとして。とにかく職場に戻るよ」

「う、うん」

奈々子に急ぎ立てられるまま、真子は更衣室を出てシステム部に戻る。

そこで真子は、自分の席の隣に拓海の姿を捉えた。拓海の姿を見て、ほっとする自分がいる。彼なら、この現状をなんとかしてくれるんじゃないかという期待が胸に湧く。

「真子、大丈夫か？」

席に着くと、横から小声で尋ねられた。

真子は仕事に取りかかりながら、俯きがちに頷く。

「和磨と話してきた」

そう言われて、拓海のほうを向いた。期待する気持ちと不安が、同じだけ込み上げる。

和磨さん、なんて言ってたんだろう？

「そのうえで言う。大丈夫だ」

本当だろうか？ 信じたいけど……

「だから安心して仕事をしよう。なっ？」

氣遣ってくれる拓海に感謝の気持ちが増える。そうだね。忙しい合間を縫って、手伝いに来てくれる野本さんに、これ以上心配かけちゃダメよね。真子は拓海に向けて頷いた。

いまは気持ちを切り替えて、仕事をしなきゃ。

真子は拓海を安心させようと、少し無理をして微笑み、そのあとはしっかり仕事に集中した。

「よし、今日のところはこれで抜ける。あとは大丈夫だね？」

「はい。野本さん、ありがとうございます」

拓海が手伝ってくれたおかげで、今日の仕事をかなり進めることができた。

「それじゃ、仕事が終わったらすぐに仲直りしろよ」

真子はこくりと頷いた。そうできればいいんだけど……

拓海は真子のことを気にしつつ、改造企画部の自分の仕事に戻って行った。

「真子先輩」

仕事が終わり、更衣室で帰り支度をしていると、深田が声をかけてくる。

「専務さんと、喧嘩しちゃったんですか？」

「まーこ」

深田に答える前に、奈々子がやってきた。

「あの……さっきはごめん」

「そう言うってことは、少しは落ち着いた？」

「……そう、でもない」

真子が正直に答えると、奈々子は「あらら」とコケる真似をする。

「真子先輩……指輪……専務さんに預けたんですか？」

真子の左手の薬指を見つめて、深田が聞いてくる。

「はい。深ちゃん、そこ、追及しない」

「だ、だって気になりますよお」

深田が焦ったように言ってくるが、奈々子はそれ以上言わず真子のほうを向く。

「とにかくさ、あんたは、きちんと専務さんに謝りな」

「うん」

謝るしかないよね。でも、できてしまった溝を、埋めることができるのかなあ？

心許ない気持ちのまま、真子は更衣室のドアに向かった。

「真子、頑張りな！」

奈々子に激励され、真子は振り返って微笑んだ。

「ありがとう。頑張るね」

更衣室を出ると、廊下にはすでに仕事を終えた同僚たちがたくさんいる。

なんだか、みんなに注目されてる気がするんだけど……これって気のせい？

落ち着かない気分を味わいながら、真子は専務室の手前で立ち止まった。

頭の中は、和磨にどう謝罪するかでいっぱいいた。なのに、専務室を前に、あと一歩が踏み出せない。

「真子」

そのとき、背後から急に呼びかけられて、真子はどきつとした。

ぎこぎここと首を後ろに回すと、そこに和磨がいる。てっきり専務室にいたかと思っていたのに……

「仕事終わったのか？ もう帰れるか？」

和磨がそう聞いてきて、真子はぎこちなく頷いた。ふたりの間に、ギクシャクした雰囲気たまたまが漂っ



ているのを強烈に感じる。

互いに口をきかないまま駐車場へ行き、和磨の車の助手席に乗り込んだ。

「これから、指輪を買いに行こう」

「えっ？」

「君が、日常、負担なく身につけていられるような指輪を……」

そ、それって……わたし、和磨さんに愛想をつかされていないってこと？ あんな風に婚約指輪を外してしまったこと、もう怒ってないの？

「あ……は、はい」

胸にある問いを口にすることができず、真子はただそう返事をした。

和磨はそれ以上何も言わず、車を発進させる。

どうしよう？ 何か言わないと……なにより謝らなきゃ。

焦って自分をせつつくが、静まり返った車の中で言葉を口に出せない。

ダメだ、わたし……なんでこんなに意気地がないの？

自分に対して怒りが込み上げ、真子は和磨のほうを向いて口を開こうとした。だがその瞬間、「悪かった」と和磨が言った。

わ、わたしが謝らないといけないのに……

「指輪のこと、俺の配慮が足りなかった。あんな大きな石のついた指輪……確かに仕事中に身につけるものじゃないよな」

和磨は苦笑まじりに口にする。けれど……彼が、まだ心にわだかまりを残しているのが伝わってくる。

どうしたらいいの？ どうしたら、ふたりの間にあるわだかまりを消すことができるの？

できてしまった心の溝を、どうやって埋めればいいの……？

「まだ怒ってるのか？」

和磨がひどく硬い声で問いかけてきて、真子は驚いて和磨を見た。

「お、怒ってません、わたし……」

「本当か？」

「はい。あの……わたしのほうこそ、ごめんなさい」

「参ったな」

和磨はそう呟いて黙り込む。『参った』という言葉で、どういう意味で彼が口にしたのかわからず、不安と動揺でどうにかなりそうだ。

「俺はその……」

和磨は何か語ろうとして、再び黙り込んでしまった。

この沈黙がいたたまれない。胃の辺りがシクシクする。

「和磨さん、わたしに言いたいことがあったら、なんでも言ってください。お願いします」  
真子は頼み込むように言う。

「真子」

「お願いします！」

「……帰ってからにしよう」

「えっ？ で、でも……」

「まだ気持ちの整理がついていないんだ。だから……もう少し待つてもらっていいか？」

整理がついていないという言葉に、かつてない不安が膨れ上がる。けれど、待つてほしいと言われて、嫌だとは言えなかった。真子はただ、「はい」と頷いた。

和磨が向かったのは、以前ふたりで買い物に来たことのあるショッピングセンターだった。

「宝飾店は三つあるな。ここと、ここと、ここ。真子、どこがいい？」

案内板を前に、和磨は宝飾店のある三ヶ所を指さして尋ねてくる。

「あの……お店を見に行つてから、決めてもいいですか？ 店の名前だけでは、どんなところかわからないし」

「それもそうだな。それじゃ、一番近いここから行つてみるか？」

「はい」

和磨が歩き出し、真子は彼についていく。いつもの和磨だったら、当たり前のように手を繋いでくるのに、いまはそれもしてくれない。自分から手を繋ごうかとも思ったが、とてもそんな勇氣は出なかった。

和磨さんの心の中が見えたらいいのに……

彼が何を考えているのかわからなくて、不安ばかりが募ってくる。

「ここはどうだ？」

煌びやかな宝飾店を前にしているというのに、真子の心は沈んでいく一方だ。ショーケースの中で輝いている指輪たちも、少しも真子の心を動かさない。

こんなんじゃないダメだ。和磨さんから指輪を買ってもらうのに、こんな気持ちでいたんじゃないダメだ。ふたりの間に転がっている、このわだかまりを解消できないうちは、指輪なんて買ってもらえない。追い詰められた胸に痛みがさす。涙が込み上げそうになり、真子は口元を強張らせた。

「真子」

和磨に呼びかけられたが、真子は返事をする事ができなかった。心とともに喉まで萎縮してしまい、声が出てこない。

和磨さんはこんなに近くにいるのに、なんて遠いんだろう。

「か……」

帰る、と言うつもりだった。けれど、震える喉は、言葉を紡ぐことができない。

「真子？」

床を見つめた真子の瞳から、堪えきれずに涙の粒がぼとんと滴り落ちる。

そんな真子の肩を、和磨がそっと抱いてきた。

「出直そう……」

真子は頷いた。

車の中では、どちらも口をきかぬまま、ふたりの住むアパートに着く。

真子は、どうしてかアパートの中に入りたくなかった。それが何故かはわからない。けれど漠然と、恐れる何かと直面しなければならぬような気がしたのだ。

和磨が、鍵を開けるように仕種で促してきたが、真子は玄関の前に立ち竦んでしまう。

「真子？」

和磨が微かに苛立った様子で名前を呼んだ。彼の苛立ちに触れて、真子はほんの少しだけほっとした。和磨の感情に触れたからかもしれない。先ほどまでの和磨は、真子に心を閉ざしているように感じられて、怖かったのだ。

「ごめんささい」

やっと口にした声は、ひどく掠れていた。

「とにかく、入ろう」

和磨は硬い声で口にする。真子は頷き、バッグの中から鍵を取り出した。

部屋の中に入ると、和磨はすぐにスーツの上着を脱ぎ、ベッドの上に置いた。そして背を向けたまま、いつまで経っても動かない。

真子はそんな彼の後ろにいて、和磨が気持ちを話してくれるのを待った。だが、真子を拒絶しているような和磨の背中を見ているうちに、その願いは叶わない気がしてくる。

いたたまれなくなった真子は、何か言おうとして口を開けた。なかなか言葉を出せず、何度か息

をし、やっと言葉を絞り出す。

「わたしは……」

ひどく声が掠れてしまい、真子はごくりと唾を呑み込む。

どうすればいいんですか？ と、続けるつもりだった。けれど本当は、そんなことが言いたいわけじゃなかった。心の中でぐるぐる渦巻いている言葉は……

「わ、わたしのこと……嫌わないでっ！」

悲鳴のような声になった。和磨がひどく驚いた顔で振り返る。

「嫌わないで！」

真子は懇願するようにまた叫んだ。喉元に熱い塊があり、苦しくてならなかった。

和磨が手を伸ばし、痛いほど強く真子を抱き締める。彼は真子の涙が枯れるまで、ずっと抱き締め続けてくれた。

真子が泣きやんだのを見て、和磨は真子を抱いたままソファに腰かけた。

「俺が……」

そう口にしたものの、和磨はしばし言葉を止めてしまう。

「和磨さん？」

沈黙に耐えられず、真子は催促するように呼びかけた。和磨はわかったと頷く。

「ずっと、ひとつの思いが……胸の奥に、あったんだ……」

和磨はそう言うのと、真子に回した腕に、さらに力を込めた。身体を締め付けられて息が苦しかったが、その苦しさも、いまの真子には嬉しかった。

「僕は、君に一目惚れした。君を見た瞬間、心のほとんどを奪われた気がした……」  
真子は身体の前に回された和磨の腕を抱え上げて、ぎこちなく頬を寄せた。

「こんなことを考えるのは、馬鹿馬鹿しいと思う。だが、どうしても心から離れない。僕が君を思うほど、君は僕を思っていないんじゃないか……ってね」

「そんなこと！」  
叫んだ真子の言葉を遮るように、和磨は真子の唇に触れる。

「……わかっている。ひとの心なんて測れるものじゃない。思いを比べるなんてことに、意味がないことはわかっているんだ。でも、その考えが取りついて離れない。……おまけに、僕と同じくらい君にも愛して欲しいなんて望んでるんだ。……なんて愚かなんだろうな」

和磨は真子の片手を取り、肩越しに彼女の手の甲に唇で触れた。

いま、和磨になんと声をかければいいのか、真子にはわからなかった。

和磨の言うように、ひとの思いなど測れはしない。わたしの愛だって、和磨さんに負けないほど大きいと言いたかった。けれど、そんなことを口にしても、意味がないのだろう。

「君が指輪を躊躇いもなく外したとき、その思いが急激に膨らんでしまったんだ。どうしようもないくらいに怒りと、いつか君は僕から離れていくんじゃないか、そんな恐れまでが湧いた」

「わたしも、怖かった。あの瞬間、和磨さんの心がわたしから離れていったのが、はっきり伝わっ

てきたから……」

「ごめん。僕が馬鹿だった」

真子は首を左右に振って、和磨の言葉を否定する。

「わたしが指輪を外したせいです。あの……指輪は？」

真子は、躊躇いながら指輪について口にした。

指輪はまだ和磨の手にあるはずだ。一刻も早く、真子はそれを自分の手に取り戻したかった。

「スーツのポケットだ」

和磨は立ち上がり、ベッドの上に無造作に置いてある上着を取り上げる。そして取り出した指輪を摘まんで、じつと見つめた。

落ち着かない。それを早く返してほしかった。でも、口に出せない。

「確かにでかいな……こんな物を指に嵌めて仕事を……どう考えてもないよな」

和磨は表情を変えず、どこか納得したように言う。真子の胸に、ピシッと痛みが走った。

「和磨さん」

焦って呼びかけると、和磨は真子を振り返る。

「これは、しまっておこう」

「えっ？」

真子は、驚いて声を上げた。

「物に囚われるつもりなどなかったのに、僕はこの指輪に意味を持たせすぎた。真子、こいつの箱

は？」

「急激に苛立ちが湧いた。和磨はひとりで決めつけすぎだ。」

「勝手に決めないで！」

「憤った心のまま怒鳴ったら、和磨が驚いたようにこちらを見た。」

「真子？」

「わたしは……わたしは、その指輪がとても大事だから、和磨さんに預かって欲しかったんです。指輪を外すのを躊躇わなかったのも、和磨さんの手に預けるからで……だから……だから……」

「真子は和磨の手から指輪をひったくるように取り上げると、自分の指に嵌めた。そして、ぼろぼろと涙を零しながら、和磨を睨みつける。」

「和磨さん、勝手にわたしの気持ちを決めつけないで！ わたしのほうが、和磨さんのこと愛してる！ 絶対にそう！ わたしの人生に突然現れて、わたしのことさんざん翻弄して……ひとの心の中に勝手に住み着いて……なのに……バカッ！」

「真子は腕を振り上げ、憤りをぶつけるかのように和磨の胸に叩きつけた。勢いに押されて和磨が後退したが、真子は和磨の胸を叩き続けた。」

「はあ、はあ、はあ」

「感情に駆られるまま、和磨に憤りをぶつけていた真子だったが、やがて疲れ果て、手を止めた。肩で息をしながら和磨を見上げる。」

「ごめん」

和磨がぼつりと言った。

「驚いてまじまじと見つめると、和磨がそんな真子の瞳を覗き込んでくる。」

「勝手に傷ついて、勝手に決めつけて……君の気持ちを考える余裕もなかった。ごめん」

「和磨さん……」

「和磨がそっと抱き締めてきた。真子はしがみつくように和磨を抱き締め返す。和磨の体温が伝わってきて、ようやく真子の不安は消えた。」

「よかった。本当によかった。もうこのままずっと抱き合っていたい。和磨さんを離したくない。愛してる。和磨さん……」

「初めての仲違いからこうして仲直りできたことに、ほっとすると同時に甘い気持ちが込み上げてきた、そのとき……」

「腹が減ったな」

「すっかり甘い気分浸っていた真子は、その台詞にポカンと口を開けた。」

「どこかに食べに行くか？」

「胸がムカムカしてきて、真子は和磨を睨みつけた。乙女心を踏みにじられた気分だ。」

「行きません！」

「怒鳴りつけるように言えば、和磨は眉を上げる。」

「わたしの気持ち、ぜんぜんわかってくれないんだからっ！」

「なら、何か作ってくれるか？」

性懲りもなく和磨は言う。

「作らないっ！」

反射的に怒鳴った真子は、和磨から離れてベッドに突っ伏した。

八つ当たりだとわかっていても、言葉を止められない。

「わたしは絶対作らない！ 食べ物にも行かない！ 和磨さんの勝手にすればいいわ！」

「わかった」

和磨はあっさりと受け流す。

真子は驚いて和磨を見た。彼はそのままキッチンに入って行ってしまおう。

ベッドに伏せた状態で、真子は聞き耳を立てる。するとまもなく、調理をしているらしい物音が聞こえてきた。本当に自分で作ることにしたようだ。

もおっ、ほんと和磨さんってよくわからない。

真子は疲れを感じて、ため息をついた。

今回のことは、これで決着がついたと思っただけなのかな？

言いたいことを和磨さんにつづけたおかげで、わたしの胸に巣食っていたもやもやは吹き飛んでしまってる。

それがよかったのかな？ この諍いは必要なものだった？

……そうか、そうよね。お互いに、このわだかまりを胸に秘めてしまったら、いつかどこかで爆発していたに違いないもの。つまり、これは必要なものだったんだ。

真子はむくりと起き上がり、ドアのところから和磨を窺った。

和磨は狭いキッチンをきびきびと動き回っている。和磨の表情も、すっかりしてるみたいだ。

真子は足音を忍ばせて和磨に近づき、彼の背中に抱きついた。和磨は、まったく気に留めずに夕食の支度続ける。

あちらこちらと動き回る和磨に、真子はくっついて歩いた。和磨の香りを胸いっぱい吸い込んで、しあわせ気分を満喫していた真子だったが、だんだんそれだけでは物足りなくなってくる。真子はタイミングを見計らって、するりと和磨の前に回り込むと、ぎゅっと抱きついた。

「真子。これじゃあ、手を動かさない」

和磨の言葉を、真子は無視する。

「なら、いいさ」

和磨がそう言った次の瞬間、真子は和磨に抱え上げられていた。

「か、和磨さん」

「このままベッドに行こうか？ それとも一緒に風呂に入るかな？」

和磨の言葉は、真子ではなく、自分に向けてのものだ。

「か、和磨さん、お腹空いてるんでしょう？」

にわかに慌てふためいて足をばたつかせる真子を、和磨は楽々とベッドのある部屋へと運んでく。

「空腹感には、色々種類があるのさ」

真子をベッドの上にとざりと落としした和磨は、彼女の瞳を覗き込んでにやりと笑う。その笑みは悪どくて、物凄く怖かった。

「わ、わ、わたし、お腹空いたみたい。夕食の準備を……」

急いで起き上がるうとする真子を、和磨は乱暴にベッドに押し戻す。

「君が仕掛けたんだぞ。責任を取ってもらおうか」

真子は、乗り上げてくる和磨の身体の重みをこれでもかというほど感じた。

「それじゃ、夕食を……」

「ああ、たつぷりと食べさせてやろう、この俺を……な」

和磨はさらに悪どい笑みを広げる。

和磨の欲望は、もう目的を果たすまで消えはしないだろう。

唇を塞がれ、息もつけぬ濃厚なキスに、頭がぼおつとなる。

「はあ、はあ、ん、はあっ」

ようやく唇が離れ、真子は喘ぐように息をする。すると胸の先端に性的な興奮を呼び起こす刺激が走った。いつの間にか、和磨の手が真子の服の下に入り込んでいる。それだけでなく、ブラの中にも潜り込んでいた。敏感な部分に直接触れられ、真子は身を固くする。

「感じるか？」

「そ、そんなこと、く、口にできません」

顔を赤らめて、真子は反抗するように言った。すると、まるで懲らしめるみたいに、和磨は指で

真子を攻め始めた。

「ああん……や、やめ……はあん」

止めようもなく艶めかしい声が出てしまう。口を塞ぎたいが、和磨に腕ごと身体を押さえつけられているせいで、それもできない。

「か、和磨さん」

「なんだ？」

「な、なんだじゃないんです。……ううっ。や、やめ……てえ」

「どうして？ やめる必要なんてないだろう？」

「だ、だって。んんっ、はああん……」

「いいなあ。その声……最高に煽られる」

煽るつもりはありませんと言っただけなのに……もうそれどころじゃない。

淫らに昇っている自分が恥ずかしいのに……この昂りに身も心も任せてしまいたくなる。

「ほら、もう降参しろ。まあ、抵抗されるのも美味しいが……」

和磨はそう言っただけで、真子の服を首元までたくし上げた。ずれたブラジャーが視界に入り、真子は目を剥いた。片方の膨らみが完全に和磨の目に晒されてしまっただけでなく、

「ああっ……」

カッと血が上がり、顔が真っ赤になる。和磨はといえば、憎たらしいことに真子がじたばたもがく様子を楽しんでいる。真子は和磨を睨みつけた。

「君が何をしても興奮を煽られるな」

そう言った和磨は、すでに硬くなった真子の乳首を口に含んだ。舌でころころと転がされ、身体の中に淫らな熱がこもり始める。秘部に困った感覚が生じ始め、真子は太腿にぎゅっと力を込めた。胸に与えられる快感に耐え切れなくなり、真子は和磨にしがみついた。すると和磨の熱く猛ったものが太腿に押しつけられる。

「もう余裕ぶってられないな」

そう呟いた和磨は、真子の服を剥ぎ取っていく。スカートを引き下ろされてしまうと、ショーツ一枚の姿だ。焦った真子は、下半身を両手で押さえて隠した。そのせいで、思いがけず胸の膨らみを強調してしまう。

和磨は、そんな真子の姿態を上から楽しそうに眺めている。

「恥ずかしいから、そんな風に見ないでください」

「俺からすれば、君が恥ずかしがる様が、堪らないんだが」

真子は和磨の目から逃れようと、両腕で胸を庇いながら身体を横に向けた。その瞬間お尻を撫でられ、「ひゃん」と叫び声を上げてしまう。

「も、もおっ」

「そう言われてもな。君のお尻は、視界に入ると撫でなくなるんだ」

身を捻って和磨の腕を掴むものの、和磨は真子のお尻を撫でるのをやめない。真子は、その手を避けようとまた仰向けになった。

和磨はベッドの上でジタバタする真子が面白いらしく、笑いながら覆いかぶさってきた。

ぴったり身体を密着させ、和磨は真子の身体のラインを撫でる。ふたりの身体の間で真子のブラジャーはくしゃくしゃになった。

「わたしだけ、はだ……そ、その……和磨さんも……」

「俺も脱いでほしいのか？」

「もおっ、そんな明け透けに言わないでください。もつと言葉を選んで……」

「言葉をねえ。……俺の裸体がそんなに見たいか？」

「そんなこと……」

「思っていない？」

からかうように言われてむっとした真子は、和磨のシャツに手を伸ばした。何も言わずにボタンを全部外し、彼の身体を押し返して身を起こす。そして和磨のシャツとインナーを脱がした。

上半身裸になった和磨を目にしたところで、真子はハッと我に返った。

つい勢いでやってしまったことに自分で動揺していると、和磨は「ズボンは何？」と催促してくる。

「そ、そっちは自分でやってください」

「どうして？」

「ど、どうしてもです！」

「せっかくだから、脱がせてほしかったのに。仕方がないな」

もおっ、和磨さんったら。ズボンはハードルが高いんですっ！